

島木健作論

—転向の問題についての考察—

一十五回生 大坪泰子

はじめに 次

本文

第一章 第一短篇集「獄」
第二章 「再会」と「再建」
第三章 「再建」から「生活の探求」への移行
あとがき

まえがき

「転向」とは、いまでもなく昭和初年における共産主義からの離脱を意味する。一般に「転向」という言葉が定着するようになつたのは、佐野・鍋山の声明書『共同被告同志に告ぐる書』が昭和八年七月に発表されて以来のことである。「転向文学」もまたそういう時期を反映して出現した文学作品のことである。具体的には、昭和八年二月の小林多喜二虐殺事件及び翌年のナルブ解体によるプロレタリア文化運動の決定的崩壊と相前後して書かれ始めた。

島木健作が生涯一貫して転向作家と呼ばれたのは、島木

の政治的転向が文学的再生への道を辿り始めた時期が、まさに続出する転向文学の時代的潮流と一致したためである。島木は、昭和初年に青春時代を迎えていた。全国的に農村における革命運動実践家として、当時最も強力だったといわれる香川の農民運動に身を投じ、その後三・一五事件により検挙・転向を経て出獄する。そのコースは多くの転向者と共に走るものだつたが、島木は病により不可能になつた。「第一義の道」への復帰を文学に求め、作家として蘇生する。島木自身の言葉によると「文学といふものも私にあっては、転向問題を考へる一つの場としての意味を持たざるを得なかつた」とあるように、島木の文学は、第一義の道を模索するための手段として使われるようになる。ここに作家としての島木の独自性が出てくるのである。

ここでは、島木の転向を解明する上で最も重要なと思われる作品を選んだ。自分の獄中体験を基盤にして書いた「獄」「盲目」から、革命的視野に基づいた「再建」とその前段階になつた「再会」を経て「生活の探求」までの作品を通して

じて島木の転向の問題について考察してみたい。

第一章 第一短篇集「獄」

第一短篇集「獄」には、五つの短篇が収録されている。いずれも題材は「獄」という特異な存在であり、この一般社会から隔離された陰惨な世界に、極限状態に追い込まれた人間を配してある。とりわけ特異な色彩を帯びた「獄」と「盲目」は、非転向を貫き通す人物を見る時の主人公（作者自身）の心理と獄中ににおける転向を解明する上で重要である。

「獄」は重症の肺病患者である太田が転向寸前の暗澹たる心境にいる時、獄に犯されながらも非転向を貫き通している同志岡田を見て動搖する、という物語である。太田は岡田を畏敬し羨望すると同時に、共産主義者としての己れの政治的信念について苦悶する。だが獄といふ閉鎖的、非人間的な場に置かれ、しかも重症の肺病である太田が、精神的動搖をきたすのは云わば当然のことであり、肝心の思想そのものについては非常にあいまいにしか描かれていない。このことは岡田も同様で、身体的には太田よりも苛酷な運命を背負っている岡田の、非転向に至る心理過程は非常にあいまいである。このあいまいさは何を意味するのであるうか。この問題は、転向に関する心理の過程－思想的動搖、心理的・肉体的苦痛－を描くことが客観的に可能か否かに通じるものではないかと思う。思想を棄てたか否かという二つの極に主人公を設定する時、転向者の非転向者への負い目は、非転向者の固持する思想そのものに對して、無条

件に降伏させ思想そのものを冷静に客観的に論ずることを妨害する。その結果、転向に動搖する心理の過程は、あいまいにしか描けないのである。しかも「獄」の執筆動機は、自作年譜によると「香川時代からの親切な友人米村正一に読んでもらふことだけを考へ」て書かれたものであるとしてある。つまり、重症の肺患故に転向せねばならなかつた島木にとって、非転向者への負い目はめぐいきれないものとしてあつたし、そのコンプレックスへの救済の役目を担うものとして「獄」は書かれたのである。従つて「獄」執筆当時の島木には、「思想」を描くことはできなかつたのではないか。

「獄」に統いて「盲目」が発表される。これは、思想犯で獄中にある古賀という男が、入浴中の不注意から失明してしまうが、なおよく非転向を貫き通す、という物語である。転向を肯じないという点では古賀は「獄」の岡田と同じ立場にある。だが、その過程にはかなりの相違が見られる。古賀が到達した心境は、「一つのあきらめの世界」である。つまり「すべてを自然のまゝに任せきり、いつこへか自分を引ずつて行く力に強ひて逆らはうとはせず、そのまま従ふといふ態度」である。このような「自然のままに従う」という思考法は、問題の所在を明らかにせず未解決のまま放置するという点で、島木の考え方の弱さに通じるものがあるようと思える。しかし、島木の内部に、転向への倫理的負い目がある以上、あの冷酷な獄中で転向を肯じないためにはどうしたらよいのか、という仮定あるのは当然であ

るといえる。またその仮定が願望である限り、島木の「思想」は表面化されないのである。「盲目」で作者はいう。

生きている人間が死の状態にまでつきおとされ、しかりもなほ生きて行かねばならぬとしたならば、この問い合わせこそ「癡」「盲目」を一貫して流れる主題である。

「獄」は、権力の強制・圧迫の最大の武器であると共に、社会からの完全なる孤立を可能にさせる恐るべきものである。

「癡」「盲目」等、一連の監獄もののテーマ——転向の問題は、思想的には考察され得ず、階級的信念を環境に強いられてするべく余儀なくさせたものへの反対と、島木自身の内部に潜んでいる非転向者への倫理的負い目の解消へと追い出されてしまった感がある。

第二章 「再会」と「再建」

昭和七年、二十九才の時、島木健作は仮釈放となり、翌年農民運動史を書くために、香川時代の農民運動の資料収集を始める。だが転向問題が根底にあり書き進めることができず、その解決を農民運動への復帰に求めたとたん再び病に倒れてしまう。島木は「死ぬかも知れない」という恐怖と「文学的な表現で何か書いて見たい」という焦躁とに駆り立てられ、その時一気に書いたのが「癡」である。この「癡」そして「盲目」の執筆が島木にとって転向を強制させたものへの反対と、転向者としてのコンプレックスへの救済の役目を担うものとして一応のピリオドが打たれてか

らは、やはり当初抱いていた「転向問題」の解決を農民運動の実践によつて成し遂げる決意を実行に移さなければならなかつた。こうして結実した小説が処女長篇「再建」である。その「再建」への準備段階として、革命的視野に基づいた農民運動批判の姿勢を確立させた「再会」という短篇がある。これは、出獄後進歩的なインテリとしての仕事に従事している私が、五年ぶりに出獄してきた同志木村信吉と再会し、木村が合法的に農村に居住し大衆の中に沈潜した農民運動をやり始めたことを聞くという内容である。この「木村」なる人物が、日農香川県連で島木と共に活動し、三・一五事件で検挙された「宮井進一」であることを最初につきとめ、島木健作の転向の位相を分析したのが大久保典夫氏である。氏は「倫理的には島木の転向意識の対象は宮井進一ただ一人かもしれない」と述べ、宮井が合法的に香川に居住したことを聞くに及んだことで、「島木は、自己の運動批判にともなり倫理的負い目を払拭し、革命運動の批判の観点を定立したのである。」という見解を示しておられる。つまり、島木はかつて実践に携わつていた時期に、革命運動が農民大衆と遊離したところで性急に進められていく状態にある程度の眼を持つてはいたのだが、農民運動家としての敗北意識のために、具体的な農民運動家への展望を確立しえなかつたのである。ここにおいて島木は宮井と「再会」することにより、沈潜していた転向者としてのコンプレックスを払拭し、革命的視野に基づく運動批判の姿勢を確立したのである。

転向作者としての島木の最大の業績は、いうまでもなく「再建」である。これは、昭和六年秋から九年春までの組織破壊後の香川県の農村及び農民の実態と、三・一五事件により検挙され、獄中にある農民運動家の生活等を相互に描いた長篇である。主人公には、前者の現実的実践場面を山田春乃が代弁し、後者の理念的場面を浅井信吉が代弁するものとして設定してある。この二人は、浅井による、かつての組織と運動方針への批判を踏まえた上での組織の再建志向が、春乃を通して現実の生活面で探られていくという点から、理論と実践の相關的役割を演じているといえるだろう。ここで浅井の組織及び運動方針への批判というのは、組織の中心を成していたのが、いわゆるインテリ出の組合書記であつたために、運動方針が農民大衆の現実的要求と遊離したところで進められていたことの指摘である。

このようないくつかの批評と組織再建への具体的手段は春乃を通して忠実に移されて行くのだが、「再建」には現実的実践という意味において春乃と同じ位置にある谷川清吉といふ人物が登場する。谷川清吉は、旧農民組合の幹部で、組合運動の高揚期には保守的で中間派的立場をとつていたが、組合壊滅後は農民の実質的な指導者として部落の日常生活において世話を仕事としている。谷川は、大地主でナチュラムの信奉者である松崎真次郎が設立した農民興国会に参加し、そこに集約された農民を逆に再組織することにより運動の再建を考えているのである。そのうち興国会の農民の間に「誰が煽動するでなく申合せもない」のに自然発生

的に対地主との抗争意識が萌芽する。こうした農民の意識の高揚は結果として、中間派的立場を国守していく谷川を最左翼へ押しやることになるのである。谷川は春乃と手を組み、小作人大会を企画するが、その運動が自然発生的であつたにも拘わらず、当時の左派組合である全農全国会議派がとつていた農民委員会運動と段階的に照應し弾圧されることになる。谷川と春乃は検挙され組織再建への道は断ざされてしまう。

島木は、谷川や春乃という先進的な農民を設定することにより、左翼思想家に啓蒙されない所での農民自身の手による自然発生的な運動の高揚に、眞の革命運動への方向付けを示唆したのであろう。だが結局谷川も春乃も組織の再建を可能にできなかつたとしたのは島木がこの作品に当然受けける弾圧を予期したからで、島木はぎりぎりの合法性をもつて慎重にこの作品を書いたと思われる。

平野謙氏は「再建」の価値を次のように評しておられる。その主題の一つとしてえらばれるものは、日本の革命運動そのものの批判にはかならぬ。農民の生活を土台として、現実密着からする革命運動の観念性の批判といふ困難な主題に、作者は取り組まざるを得なかつたのだ。：略：私は「再建」をわが転向文学の異色篇として高く評価したいと思う。

このように「再建」の主題は、革命運動の批判という転向文学史上稀な意義を持つものであり、またそれ故に左翼意識を煽るものとして発売後わずか十日程で発売禁止処分を

受けてしまうのである。島木は発禁処分にあったことで、「再建」の第二部で主人公の出獄後の転向問題が取り上げられる筈であつたがその機を失つたことを残念に思う、と述べている。果たして島木は、主人公浅井信吉の転向問題をどのように描くつもりであつたのだろうか。この疑問には大久保氏をはじめ「再会」の木村信吉のモデル宮井進一の出獄後の生活から推理し解答を与えていた。

「再建」は、宮井進一の村や部落における生活記録を元にして書かれたものであり、その事より推測できることは、浅井もまた宮井と同様に大衆に密着した形で農民運動を実践して行くだろうということである。なお、その後の官井は、一貫した農民運動家として活動を続けている。島木と思想的交渉があつたのは、おそらく「再建」までであり、発禁後しばらくして島木は自ら官井との交際を断つている。このことは「再建」以後の島木の作品の内容を決定付ける一つの要因となつた。

第三章 「再建」から「生活の探求」への移行

「再建」発禁後わずか四ヶ月の月日を経て発売されたのが第二の長篇「生活の探求」である。「再建」が、組織壊滅後の香川を舞台に組織と運動方針の批判を主軸に据え、また一方には組織再建の願いを込めて書かれた作品であったのに比べ「生活の探求」は、革命運動を背景にした農民運動の視点から完全に脱却したところで、抽象的に更に実教的に、人間の生き方を模索しようとした作品である。こ

の二作の位相の大きな相違、それが実質二ヶ月というわずかな期間だけの変化だけに、この間に島木の転向の問題が隠されているといえるだろう。

「生活の探求」は、東京での学生生活に疑問を抱き中途で放棄して故郷に帰った主人公杉野駿介が、農村での厳しい現実をひとつひとつ乗り越え、農民としての自覚を持つ新しい探求の道を発見していく姿を描いた作品で、筋としては非常に簡単なものである。だが、あれ程のベストセラーで迎えられたのは、駿介の農村での生活態度、勤勉実直な生活信条が戦時体制へと着々と歩を進めていく国家の意図により極めて倫理的になることを強いていた當時の国民の状況を合致するものがあつたからである。駿介の存在は、まさに当時の理想的青年像に値するのである。ところで、駿介は何故東京の大学生活を中途してまで帰農せねばならなかつたのか。そこには、知識階級への批判があるのである。しかし駿介の知識階級への批判は、シテリゲンチャの知性の世界を観念的であるが故に否定し、そこににおける苦悩や問題を全く回避した形で、農村での生活の実体の方に、より多くの人間としての価値を見い出しているだけのことであるといえる。これは島木の考え方にも通じる。島木は自身の転向問題を以前のように、知識階級批判をも含めた政治的側面からは考察せずに、人間の倫理性を強調する精神的側面から眺め始めたのではないだろうか。その根拠は、「生活の探求」についての一節に見られる。

転向ということが、単にある政治上の主義や、政治的な組織からの離脱といふやうなことではなくて、さらに深い人間の精神の問題であること、それは求道の過程そのものであること、その意味において、それは一生の事であることを、真に深く自覚したのは、「生活の探求」においてであつた。

ところで、「再建」から「生活の探求」への移行に見られる転向の問題について、これまで大きくわけると二つの見解が論じられてきた。ひとつは退行ないしは現実への屈伏とみる見方である。これは、島木の再転向といふで評価され、「續」から「再建」までの思想傾向が「生活の探求」に至つて、また新しい思想へと転向したことを探していいる。二つ目の見方は、「再建」から「生活の探求」への屈折が、現実の農民の外的強制による変化によつてもたらされたものであり、生涯一貫して大衆追随主義者だった彼の大衆密着への志向には何らの変化もない、ということがである。つまり、「再建」での農民は自然発生的に対地主との抗争意識が萌芽し、革命的気運にみなぎついていたが、「生活の探求」での農民は戦時体制の下、非常に倫理的に柔順になることを強いられて、この農民の変化である。これは「再建」から「生活の探求」への移行をむしろ連續した作品と見える見解である。

私は、この二つの見解に加えて「或る作家の手記」を引用した作者の心理を探つてみようと思う。それによると「再建」は作家としての「最初の大きな転向であり、そし

て「生活の探求」こそが今まで書かずにはいられなかつた氣持の表現されたものであること。更に作品の上だけではなく人生態度の上でも変化しつつあることを吐露している。例えば「理屈でものをきめてゐたことよりも、気持に添ふとか添はぬとか、好きだと嫌いだとかいふことを尊重したい」と述べている。このように、島木自身に生じてきたこの心情の変化は決定的に作品の位相に投影されたといえよう。この二作の間に横たわる溝に一つの結論を与えるなら、次のようになるであろう。

生涯一貫として大衆密着の志向を持つていた島木が、除々に誠実で真面目な努力主義の姿勢を確立していくにつれて、大衆の動向を社会総体的に把握すべき主体を喪失していくこと。更に、彼の生活態度がそのように変化していくのは、もともとのストイックな性格に加えて、「再建」の発禁、或いは、思想犯保護観察法に代表されるような、生きながらにして思想撲滅を測るべき強制・圧迫が、あつたこと。この二点によって集約できよう。時の状況は第二次大戦へと向かうファッショの荒れ狂つていた時期であった。そうした暗黒時代にあって「運命の人」の一節に島木の非痛な叫びを聞くような気がする。

農民の運命をそのまま自分の運命としたいといふ僕の願ひには、憤りと祈りに似た気持があるといふことを君は感じてくれるだろうか？

あとがき

昭和四年に、島木は獄中において転向声明をした。この要因が、肺患の悪化と大衆遊離で進められてきた従来の革命運動への批判にあることは既に述べてきたが、これは島木の政治的側面からの転向であるといえる。出獄後、島木は文学として蘇生した。当初文学は第一義の道を模索するための手段であった。それは「癪」から「再建」までの作品によつて形象された。しかし何らかの形で従前の運動に復帰しようとする志向は、おそらく「再建」まで四ヶ月後発表される「生活の探求」は全く異なつた位相を呈していた。この二作の間にある変化に、島木の文学的転向がひそんでいると思われる。

島木の農民と運命を共にしたいという願望は、「生活の探求」を境にして顕著になつてきただけであるが、この運命を肯定する考え方は、「すべてを自然のままに任せる」という「盲目」の古賀の心境に通じるものがあり、早くから島木の思考法の基礎となるもであつた。ただ彼の一貫した大衆密着への志向が、大衆の動向を社会総体的に把握すべき主体の喪失を招き始めた時、より明確に作品の間に断層をもたらしたのではないだろうか。そして、彼の政治性を徐々に壊滅させていったのが、一つには「思想犯観察保護法」等々にみられる。網の目のように張りめぐらされた国家の執拗なまでの弾圧にあつたことも忘れてはならない。たゞその中にあつて、わずか十年の作家生活を、あくまでも誠実に倫理的に生き抜いた島木健作の姿は、確かに

思想家としての弱さを内包しつつも、人間として精一杯生きるという肉声を聞くようである。

「虎狩」論（その一）

木村一信

その他に選外佳作として十篇の作品名と作者名とを付記している。中島の「虎狩」はその第八番目に記された作品であつた。

中島敦の作品「虎狩」は、雑誌「中央公論」の昭和九年一月号（第四十九年第一号）における新人发掘の呼びかけ、すなわち「論文・中間物・創作」の原稿募集に応じて書かれたものである。この時の募集は、中央公論社としてもかなりの力を注いだらしく、社長であった嶋中雄作の「宣言」も付載されている。そこには、「新人出でよ、新人出でよ、今ぞ新人輩出の秋である。」との言葉がみられ、応募者の意気をそそるものがあつた。原稿締切は四月三十日、枚数は四百字詰百枚以内。その結果は、昭和九年七月、「中央公論」臨時増刊・新人号（第四十九年第八号）において、「創作」の応募総数一四五八篇という多数のうちから四篇が当選作として発表された。それは、「断然他を抜」いていふと評された島木健作「盲目」、丹羽文雄「贅肉」の二篇と、「兎に色々な条件を具備してゐる」ところの平川虎臣「生き甲斐の問題」、石川鈴子「無風帯」の四篇であった。これらの作品は「中央公論」同号に掲載されたが、

